

234

(ふりがな)	なかにしき	234
氏名	中西三紀	
学位(専攻分野)	博士(経済学)	
学位記番号	経博第 351 号	
学位授与の日付	平成 20 年 9 月 24 日	
学位授与の要件	学位規則 第4条第1項該当	
研究科・専攻	経済学研究科経済動態分析専攻	
(学位論文題目)		
チリにおける輸出農業の展開と農業資本主義化		
論文調査委員	主査教授 岡田 知弘 教授 大西 広 准教授 坂出 健	

(論文内容の要旨)

本論文は、著者によれば、第一に 19 世紀後半に形成されたチリ農業の歴史的構造を前提として、1980 年代後半以降、生鮮果実輸出国となったチリ農業に、いかなる構造変化が生じたかを明らかにすること、第二に、その分析のうえに、生鮮果実輸出の拡大がチリ農業の資本主義化にどのような特徴を付与したかを検討することを、課題としている。

序章「課題と視角」では、ラテンアメリカ及びチリの資本主義および農業の発展をめぐる先行研究のサーベイをしたうえで、上述の課題設定と同時に、3つの視角を提起している。著者は、代表的な先行研究として、構造学派のピント、新構造学派のスンケル、ラディカル派のクエバとドスサントスらを取り上げ、それらの研究成果を指摘するとともに、1970 年代以降のチリを対象とした研究が欠如していることを指摘し、グローバル化の進展するなかでの新たな視角設定の必要性を論じる。著者が本論文で提起した視角は、第一に歴史的考察であり、とりわけ世界農産物市場の構造変化がチリ国内の農業構造をいかに規定したかという点である。第二に、外的要因と並んで国内農業構造を規定している政府による経済・農業政策に注目する視角である。そして、第三に、上記 2つの外的・内的要因が相互に関連した結果、農業構造そのものをどのように変化させ、いかなる資本主義化を生み出したかに焦点をあてる視角である。

第 1 章「チリにおける資本主義発展と農業構造」では、分析の歴史的前提として、19 世紀後半から 20 世紀初頭のチリにおける資本主義発展と農業構造について検討している。とりわけ、大農園（アシェンダ）の経営およびその労働力編成（インキリーノ制）に焦点をあて、当該期のチリ農業の資本主義化がチリ型地主農業の資本主義化であったと指摘している。

第 2 章「現代チリ農業の歴史的位置と農業政策」では、現代チリ農業の歴史的位置を検討している。その結果、20 世紀前半のチリ農業が基本的には 19 世紀後半の地主農業の資本主義化の延長線上に位置し、1980 年代後半以降、農産物輸出の拡大とともに、資本主義的農業の展開期を迎えたこと解明する。同時に、1964 年以降の経済政策及び農業政策の変遷を分析し、生鮮果実輸出に対する政策が一貫していることを指摘する。

第 3 章「輸出企業中心の生産編成と契約生産」では、前章を受ける形で、生鮮果実輸出企業に焦点をあてて詳細な分析を行なっている。著者は、ここで輸出用生鮮果実の生産部門が、多国籍アグリビジネスを中心とする輸出企業によって編成されたことを明らかにするとともに、多国籍アグリビジネスのチリ農業の進出過程と「反農地改革」など新自由主義的な経済政策・農業政策

の展開過程との関連性を析出する。さらに、アグリビジネス企業と農業生産者との間での契約生産の実態を、現地で入手した売買契約書を素材に分析し、輸出企業が農業生産者を包摂するシステムを解明している。

第4章「農村部の構造変化」では、チリ政府による経済政策・農業政策と、アグリビジネス＝生鮮果実輸出企業による農業生産者の包摂が、チリ農村部における構造変化をどのように引き起こしていたかを、農牧畜業センサス及びチリ農業省の統計データを活用して明らかにしている。とりわけ、農地の所有構造、経営構造、労働構造に焦点を当てた分析からは、第一に輸出生鮮果実生産を行なう農業企業家層や契約生産農業者などの「新しい専門的農業エリート」に農地が集積されつつあること、第二に農業企業家層の台頭は、北部地域にも拡大して資本主義的な農場経営が増加するとともに、零細農家の分解をもたらしていること、第三に「反農地改革」によって生み出された農業労働者層が、輸出生鮮果実生産の拡大によって資本主義的経営の賃金労働者として吸引されていき、かつての無給農業労働者から大きく構造変化したことを明らかにしている。

最後の「終章」では、あらためて本論文の各章で明らかになった結論を確認したうえで、今後の研究課題について述べている。

(論文審査の結果の要旨)

チリ農業は、小麦の輸出ブームに沸いた 19 世紀後半の一時期を除いて、零細な国内市場の下で展開していた半封建的な大農場制（アシェンダ）とインキリーノ制と呼ばれる定住小作人制度が存在していたがゆえに、未発達のままにおかれていた。ところが、1980 年代以降、チリの生鮮果実が、世界市場に大量に輸出されるようになり、チリ輸出農業が目覚ましい発展を遂げる。1970 年代までのチリ農業を研究した構造学派や従属学派の研究においては、チリが世界経済における「中心一周辺」構造において「周辺」となった過程や、それを前提にした政策論は展開されていたものの、1980 年代以降のチリ農業の劇的変化を説明することができないという限界を有していた。

本論文は、19 世紀末から現代にいたる 100 年にわたるチリ農業の展開過程を、一貫した視点から追究し、その構造変化の内実を実証的に明らかにした画期的な研究成果である。ちなみに、このような本格的実証研究は、日本国内はもちろんチリにおいても存在しない。より具体的にいえば、下記の点が高く評価される。

第一に、著者は、2 年にわたるチリ留学と数次にわたる短期調査によって得た、チリ現地の第一次資料・統計や政府機関、農業団体、農産物輸出団体、企業、協同組合、農場等でのインタビュー調査結果を、スペイン語を駆使して、整理、分析しており、チリ農業及びラテンアメリカ農業分析のみならず、チリ経済史、ラテンアメリカ経済史の研究水準を一気に引きあげた。それゆえに日本はもとよりチリ現地での研究水準をも上回る学術的成果を得ることが出来たといえよう。

第二に、上述の資料分析をもとに、チリ農業の構造変化の要因として、1970 年の人民連合政府誕生前から開始された本格的農地改革にともなうアシェンダ制の崩壊、そして 1973 年の軍事クーデター以降の軍事政権による新自由主義的な経済政策・農業政策の展開、さらにそれによるアメリカ資本をはじめとする多国籍アグリビジネスのチリ進出と契約農業の拡大があったことを析出する。とりわけ、注目すべきは、アグリビジネス企業と契約農家との契約書を現地で入手し、それを詳細に分析し、チリにおけるアグリビジネス主導の契約農業の実態を解明した点である。これまで、アグリビジネス研究においては、一次資料である契約書そのものを入手することが極めて困難であり、国際的に見てもわずかな事例研究しか存在していない。したがって、本論文は、アグリビジネス研究分野においても、顕著な貢献をなしたといえる。

第三に、以上のようなチリ農業の発展過程を実証的に明らかにすることにより、世界経済の中でのチリ農業の位置を固定的にとらえていた構造学派や従属学派の理論枠組みを批判し、著者独

自の新たなチリ農業の発展像を提起したことである。すなわち、農地改革に象徴されるチリ農業内部での構造変化と、新自由主義的経済政策と対応した多国籍アグリビジネスの進出という政策的要因及び外的要因が結合し、その接合形態である契約生産の拡大をベースに現代チリ農業特有の資本主義的発展像を析出したことは、注目に値する学術的貢献である。その際に、やはり現地で入手した農牧畜業センサス及び農業省の統計データを分析し、チリ農業の地帯構造や階層構造分析を行なっている点も高く評価できる。

もともと、本論文にも、いくつかの課題が残されている。第一に、新構造主義の学術的成果に対する評価をより精緻に行なう必要がある。とくに、1973年以降の国家による公的介入後退の意味づけについては、平板なものとなっており、政策過程や政策実績の具体的分析をもとに複眼的に見ることが求められる。第二に、チリ農業分析にあたって、現地のスペイン語文献を最重要視していることは評価できるが、アグリビジネス論や開発経済論についての英語関連文献についてもより広くサーベイする必要がある。第三に、農業経営体のミクロ的な構造変化とマクロ経済政策との関係が、必ずしも明確に実証されていない箇所があり、より精緻な分析が求められる。第四に、本論文で得られた知見が、他のラテンアメリカ諸国やアジア諸国の途上国農業の発展過程のなかで、どのように普遍化しうるのか、逆にチリ農業の特殊性がどこにあるかについて、より広い国際比較の視点から評価することも今後の課題であろう。それがなされることにより、途上国農業の資本主義化に関わる理論の深化も期待される。

とはいえ、以上に挙げた研究課題は、将来に向けた発展方向を示唆したものであって、本論文が現時点において達成した学術的価値をいささかも損なうものではない。よって本論文は、博士（経済学）の学位論文として価値があるものと認める。なお、本論文は、平成20年6月27日に論文内容とそれに関する試問をおこなった結果、合格と認めた。